

桃巖寺の句碑と桜

3月28日のレポートで引用した『生きている名古屋の坂道』（『坂道』）のなかで、本山の桃巖寺山門のかたわらに、白梵庵馬州の句碑があると書かれていた。

どうも気になり、名大の帰りに寄ってみた。確かに写真上のように、山門近くに馬州の句碑が建っていた。これまでも何回か前を通ったが、句碑を見過ごしていた。

山彦もまた打ちわりぬ大鉞（まさかり）

『坂道』によれば、馬州は尾張の俳人露川を師とした人で、もとは犬山藩士であった。後に藩を辞し、野人となって、名古屋の杉村の尼ヶ坂付近

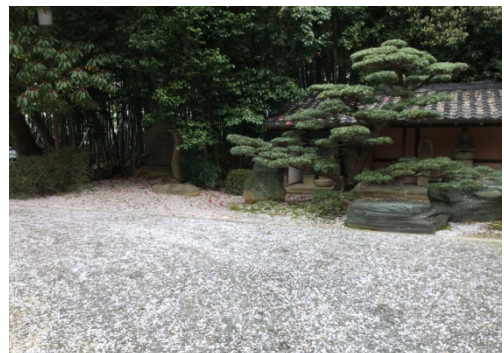


に住んでいた。身体が大きく、力がすぐれて、人となりは物事にこだわらず、きわめて愉快的な逸話に富んだ人物であった。

常に大きな斧をもち、白梵庵の斧といえ、俳人間はもちろん、一般の人々にも知られ、”斧の馬州”とか”白梵庵の斧”など、斧が彼のあだ名であった。馬州は、宝暦13年(1763)死去した。桃巖寺の句碑は、明和6年(1769)に、馬州の門人・台界によって建てられたものである。

写真下は境内の地面にひろがる桜である。まるで白い絨毯のようだ。昨年11月30日に秋の鮮やかな紅葉をレポートしたが、桜も風情がある。『坂道』によると、本堂前にあるシダレザクラは有名であったが、近年衰弱してしまった。このサクラは、寺がこの地に移されたとき、植えられたものと伝えられている。また、四方竹という四角の竹もあり、春の桜、秋の紅葉など景色がよい。

四季折々、身近に自然を味わえるのが桃巖寺のよいところだ。



(2015年4月5日)